様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０３０３８

研究課題名（和文）性からみるアメリカ黒人の社会運動：オリシャ崇拝運動の変容に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Reconstructing and Enriching Society: Race, Class, Gender, Sexuality, and Nationalism in the African American Orisa Worship Movement for the 21st Century

研究代表者
小池　郁子（KOIKE, IKUKO）

京都大学・人文科学研究所・研究員

研究者番号：６０４５２２９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、アメリカ黒人の社会運動において、性がどのように位置づけられてきたのかを考察した。具体的には、アメリカ黒人の社会運動（宗教運動、文化運動）において、黒人のジェンダーとセクシュアリティがどのように捉えられてきたのかを、(1)米国社会において人種とジェンダーやセクシュアリティが交錯する社会空間での社会的言説に関する歴史的文献資料を検証するとともに、(2)運動の思想哲学や教義、運動が対外的な戦略として構築する社会像や家族像と文化的象徴物、運動と米国内外のほかの複数の社会運動（宗教、文化運動）との交流史や連携状況、ならびに運動の限られた範囲でおこなわれる宗教的諸実践から検討した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this paper is to examine the social space of the African American Social Movement where race, class, gender, sexuality, and nationalism have been negotiated. This study, first, clarifies the way the movement limited women and sexual minorities' rights in its early days, and then the way they have challenged the patriarchal system or the culture of black masculinity. This study also argues the importance of the trans-Atlantic cultural communication in the process of reconstructing and enriching the social activism not for sexual minorities but for all those who, both men and women, were under the pressure of the politics of patriarchal family, black masculinity, and modern nationalism. Eventually, this paper scrutinizes the meaning of the racially articulated sexual representations and ideologies rooted in the US society, and the way race, class, gender, sexuality, and power are intertwined, redefined, reconstructed in the African American community and the US society.

研究分野：文化人類学、アメリカ研究、黒人研究

キーワード：思想哲学・教育　社会運動　人種・民族　ジェンダー　植民地主義　アメリカ研究　黒人研究　文化人類学

１．研究開始当初の背景

これまでの研究では、グローバル化、異種混淆化する現代社会において、現実的に破綻する傾向にある原理主義的な社会運動に代わる新たな運動の在り方、ならびに、異なる人種や宗教を排斥するのではなく、それらと共存できる文化実践の在り方について、アフリカ系アメリカ人（ アメリカ黒人）の社会運動を事例に考察してきた。そして、急速に保守化する現代社会において、少数派の社会政治的権利や宗教文化的権利を求める社会運動が、いかに自身とは異なる人種や宗教と共存しながら維持、拡充できるのかを分析してきた。ただし、人種主義に抗うために原理主義的な社会運動を展開するアメリカ黒人の集団のなかで、黒人女性や、黒人の男性同性愛者が、運動とどのように対峙してきたのかについては具体的に検討することができなかった。

そこで、本研究は、アメリカ黒人が西アフリカ、ナイジェリアの伝統宗教（ヨルバ民族のオリシャ崇拝）を核に組織した社会運動を、黒人のジェンダーとセクシュアリティという視点から捉え直すことを試みる。本研究は、以下に示すこれまでの研究成果をさらに発展させるべく、次の 2 点について考察する。(1)アメリカ黒人の社会運動（オリシャ崇拝運動）は、ジェンダーとセクシュアリティに関する少数派をめぐってどのように変容したのか。(2)アメリカ黒人のジェンダーとセクシュアリティは、ナイジェリアやキューバのオリシャ崇拝者との文化交渉においてどのように再構築されているのか。オリシャ崇拝は西アフリカを起源として、キューバ、さらにアメリカ合衆国へと伝播し、現在、ナイジェリア人が実践する宗教の「真正性」を鍵にトランスナショナルな文化交流がおこなわれている。

ここで、オリシャ崇拝運動について簡単に触れておきたい。本研究が取り上げる「オリシャ崇拝」は、大西洋奴隷貿易によって西アフリカから移動を迫られた主にヨルバ人奴隷の宗教文化が、新世界での宗教弾圧や迫害のもとで植民者のキリスト教（カトリシズム）と混淆して形成された（Brandon 1993; Clarke 2004）。米国には、20 世紀初頭から、キューバを筆頭にカリブ海域からの移民によって伝播した。

オリシャ崇拝運動（20 世紀半ば～）は、端的には、独自の思想哲学でアメリカ黒人を教育するために、「反白人・反キリスト教」を標榜し、国家内国家（黒人国家）の建設を試みた運動である。初期の運動が基盤としたのは、オリシャ崇拝という伝統を核にしたコミューン（生活実践共同体）の建設と、厳格な規則のもとでの集団生活である。これまでの研究で、アメリカ黒人の社会運動のひとつであるオリシャ崇拝運動について、その歴史的展開を追いつつ、文化人類学の視点から調査研究をしてきた。オリシャ崇拝運動の主たる特徴として、次の 3 点、(1)抵抗運動から人種的、宗教的他者との共生を可能とする運動への変化、(2)社会運動にもとづく黒人性やアフリカ性 African-ness/Africanity の構築とその身体的実践、(3)「アフリカ」にたいする社会運動の植民地主義的実践の変容があげられる。

２．研究の目的

本研究の目的は、アメリカ黒人の社会運動において、性（ジェンダーとセクシュアリティ）がどのように位置づけられてきたのかを、アフリカ由来の神々、オリシャを崇拝する運動を事例に考究することであった。具体的には、本研究は、アメリカ黒人のオリシャ崇拝運動において、黒人のジェンダーとセクシュアリティがどのように捉えられてきたのかを、儀礼の実践、宗教的位階、一夫多妻制、コミューン（生活実践共同体）の規律、宗教上の家族組織の構造などから明らかにした。

そのうえで、「少数派のなかの少数派」として強調されることの多い黒人女性や、黒人の男性同性愛者が、オリシャ崇拝運動といかに関わってきたのかを文化人類学的視点から考察した。また、彼らが運動と関わることで、宗教文化の実践や運動の実践形態がいかに変容したのかを分析した。

くわえて、本研究は2つの点に留意してきた。ひとつに、本研究は、従来の黒人運動論とは異なる視点から黒人運動におけるジェンダーを捉え直すことに貢献することを試みた。従来、黒人運動に携わる黒人女性は、白人社会だけでなく、家父長的な男性主体の組織からも抑圧されると論じられてきたが（hooks 2004）、再考が求められている（Holsaert 2010; Gibson 2014）。いまひとつに、本研究は、宗教と黒人男性のセクシュアリティがどのように交錯しているのか、という従来の黒人研究では論じられてこなかった課題について、民族誌的空隙を埋めることで着手しようとした。オリシャ崇拝では、崇拝者（司祭）と神が婚姻すると解釈される。本研究は、オリシャ崇拝が、「黒人男性は同性愛者（性的逸脱者）である」という、人種とセクシュアリティが絡んだ差別的表象と実践を助長すると同時に、彼らを受容する役割を果たしていることを検討した。

３．研究の方法

本研究は、①資料文献の収集・精査、②現地調査から構成される。資料文献の収集・精査に関しては、対象とした領域を以下に示す。【アメリカ黒人関連】社会運動、人種、性、ジェンダー、セクシュアリティ、宗教（キリスト教、イスラム、アフリカ系宗教）、若者文化。【ナイジェリア関連】オリシャ崇拝、性、伝統、宗教（キリスト教、イスラム）、社会政治、ヨルバ・ナショナリズム。【文化人類学理論、植民地主義関連】。調査に関しては、1、2年目に重点的に実施し、最終年度の3年目には補足的におこなった。

４．研究成果

アメリカ黒人の社会運動を考える際に、人種はいうまでもなく、暴力、男らしさ、黒人性（blackness）という主題を避けて通ることはできない。米国におけるアメリカ黒人の歴史は、奴隷制度、人種主義的差別制度（institutional racism）のもとでの、白人による黒人への制度的、組織的な暴力と、黒人がその暴力へ対峙するなかで生み出した黒人性を抜きにして語ることはできないからである。

そのなかに、黒人の男らしさ（manhood, manliness, masculinity）の主題も潜んでいる。黒人の男らしさは、社会的、経済的、性的領域をはじめいくつもの領域で考えられる。一例として、性的な領域を取り上げた場合、黒人の男らしさは次のような局面で問題として浮上する。白人による黒人への暴力を正当化する理由の一つとして、「性的に野蛮な」黒人男性から白人女性を保護するという言説がある。と同時に、「性的に奔放な」黒人女性が（誘惑することで）、白人男性の性的暴力を導くという言説がある（アンチオープ 2001）。

こうした場合、とりわけ家父長制、男性覇権主義の観点から呼応するとすれば、以下のような黒人の男らしさが期待される。黒人男性は、白人男性から黒人女性を保護する、もしくは表象的であれ、身体的であれ、性的に過剰になることで白人男性に対抗する。このような人種と性が交錯した男らしさの図式こそが、奴隷制度、人種主義的差別制度の時代をはじめとして、その後の時代も黒人に強要されている男らしさの問題なのである。

ベンツは、公民権運動時代を中心に、19世紀末から20世紀後半にかけてのアメリカ黒人の社会運動（活動）を暴力、非暴力、男ら

しさという側面から分析し、次のように論じている。米国南部では、黒人の男らしさの主張は、概して、白人の人種主義者からの黒人にたいする襲撃、すなわち暴行、殺人、家屋への放火などに身体的に対峙しなければならないという状況から生まれた。一方、とりわけ 1965 年以降の社会運動では、武装抵抗は、身体的な必要性というよりは、闘争的なレトリックにとどまる傾向にあり、おもに闘争的な黒人の男らしさの象徴（反抗の象徴的形態）として機能した（Wendt 2007）。

このように、19 世紀末から 20 世紀後半にかけて実践されたアメリカ黒人の社会運動には、暴力の役割や意味に違いがみられるが、労働者階級の男たちが、自分たちの家族と女たちを白人の暴力から守るという図式のもとで黒人男性としての誇りを手にしたという点ではおおよそ共通している（hooks 1981; Wendt 2007）。そこには、白人の人種主義的暴力にたいして、素知らぬふりをするのは臆病であり、暴力でもって対峙することこそが勇敢であるという男らしさが認められる。ベンツの論考は、少ないながらも女性が暴力を用いた事例を分析し、くわえて運動において女性が主導的役割を担った事例についても言及している。ただし、先に述べた男らしさが、身体的もしくは象徴的に行使されたかどうかにかかわらず、男の支配と女の従属を招くことにつながると論じる（Wendt 2007）。

ここで二つのことに着目した。ひとつは、こうした男らしさは、その後の社会運動においても引き続きみられるのか。そこに何らかの変化はみられないのだろうか、ということである。いうまでもなく、当時の社会運動の担い手たちは、指導者層を筆頭に、アメリカ黒人の社会運動のみならず様々な運動から影響を受け、自身が従事する運動を選択し（他者から強制され）、実践していた。また、複数の運動に同時に携わったり、ある運動を離れ、別の運動へ参加したりしていた。つまり、上でみてきた家父長制の礎となるような男らしさは、おおよそ、当時のアメリカ黒人の社会運動（もしくはアメリカ黒人にかぎらない社会運動）に共通の副産物であったかもしれないのである（Angelo 2009）。

いまひとつは、当時のアメリカ黒人の社会運動を暴力という視点を中心に理解しようとすることに潜む問題である。たとえば、ブラック・パンサー・パーティ（Black Panther Party for Self Defense）は暴力という概念を軸に、他方、南部キリスト教指導者会議（Southern Christian Leadership Conference）は非暴力という概念を軸に運動を展開した。それゆえ、前者は女性に抑圧的、かつ社会的に危険な活動であり、後者は女性に非抑圧的で社会的に危険性の少ない活動であるというような二元論的、二項対立的な捉え方である。

ベンツ自身やジョセフが今後の研究の必要性として指摘するように、アメリカ黒人が 20 世紀半ばから後半にかけて実践した社会運動を、暴力とそこから導かれる女性への抑圧、危険性、違法性という枠組みのみからでなく、そのほかの枠組みを交えて理解することは、運動にみられた思想哲学、手法、活動が、その後の運動に与えた影響や、運動をグローバルな文脈で分析するうえで重要である（Wendt 2007, Joseph 2009）。

以上を考慮しながら、オリシャ崇拝運動のジェンダー、セクシュアリティ、「家族」に注目すると、特徴となるものがいくつかある。一つに、男女の性差にみる優越ではなく、司祭歴をもとにした階級制度と宗教上の家族の形成。二つに、神々の性と位階、神話における性、一夫多妻制の解釈における男女成員や個々人の差と、その多様で重層的な解釈を可能とする男性結社、女性結社、宗教上の家族の実践的運営。三つに、性を受容する価値

観（非-禁欲主義的価値観）の構築である。これらの特徴によって、オリシャ崇拝運動の女性成員は従属的な地位にとどまることなく、家父長的な側面をもつ社会運動そのものを批判、変革しながら運動に従事している。これは結果として、男性成員に「男らしさ」を求め、それにもとづいて家父長的な家族を形成すべきであるという思想哲学や、自由労働イデオロギーから男女双方の成員をかぎられた領域においてではあるが解放し、性と人種に関してあらたな認識をもつ社会空間を形成することにつながっているのである。

このようなオリシャ崇拝運動の変容と展開について、ここでは運動が有する教育的側面に焦点をあてて述べる。オリシャ崇拝運動は、異なる人種や宗教を排斥し、運動内部に均質性を強いる集合的な実践を放棄し、大きく変容を遂げた。それ以降、運動は、近代的ナショナリズムの原理によらない運動を模索している。その一環として、アメリカ黒人の男らしさや男性覇権主義はいうまでもなく、それを批判する過程で創造された男性と女性の社会政治的権力の位置関係が入れ替わった「アメリカ黒人の女らしさ」や「女性覇権主義」に依拠しないアメリカ黒人の男性および女性の「生と性」（家族観、人生観、労働意識、社会参加・貢献）が探求されるなど、個人を抑圧する家族、地域社会、国民国家の再生産とは性質を異にする「人と人との共生関係」が創造されている。このオリシャ崇拝運動の特徴は、米国の教育的営為に代わるものを生み出そうとするアメリカ黒人の社会運動のあり方と可能性を呈している。そして、この運動が経験している変容は、米国の教育、すなわち黒人を他者化する知の体系のもとで、家族、地域社会をいかに築き、国家の集合的記憶とは相容れない記憶をどのように語り、その記憶にもとづいた社会空間をいかに構築できるのかという課題にたいしてひとつの導きを示唆していよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小池 郁子（KOIKE, Ikuko）
京都大学・人文科学研究所・研究員
研究者番号：60452299